823
M8N2

岷江入楚

藤裏葉

33

Freer Gallery of Art
Washington D.C.

藤裏葉

卅九歳　准太上天皇尊号

夕霧宰相中将為惑雲井雁給事

三月廿日大宮御忌日内大臣殿参極楽寺夕霧同参事

内大臣召入宰相中将袖誘引給事

四月一日比花盛内大臣以頭中将為御使招宰相中将事

源氏君下賜御直衣於宰相中将事

宰相中将向内大臣方事

内大臣物語事　頭中将為折花盃加客人盃事

弁少将歌葦垣事　頭中将為引導宰相中将令見参雲井雁事

宰相中将書後朝文於女方事

源氏又教訓宰相中将給事

八日灌仏事　其上詣賀茂御祈給事

同賀茂祭見物給事　語昔御息所車争事

藤内侍参出立所夕霧宰相中将為見訊給事　藤内侍惟光女

廿余日明石姫君入内事　其夜紫上同車給事

三日已後紫上退出明石上参内事
明年源氏君四十御賀事　秋六条院准太上天皇事
内大臣任太政大臣事　　夕霧任中納言事
夕霧中納言賜菊亭大夫乳母事 雲井ノ乳母六位宿世とこ云々
夕霧相住三条殿事 故大宮御所也　太政大臣三条殿向給事
十月廿余日六条院行幸事　朱雀院御幸事
於馬場見手競事　　蔓池魚并雛事
夏の童舞事　御遊召宇陀法師

若菜上

同 詞云御もきよしいとしく成れいう若菜よといふまて　出 此詞為巻名 秘曰
出 源氏卅九の冬也三月より十月まてみくしろ梅かえの同し比
秘 源氏卅九の春より冬まていく法なり　桑曰

御いそきのやうにと宰相中将にはなうしかうらやうく
出 それいその年とハ明石姫君の裳着(素のかうそ宰相中将のなる
かゝらなるといふ雲井の房のまへこひさ河ゆかといへり
秘 それいそきのやうにハ冷泉院の御事也宰相中将ハ宰
相のかうくとハ雲井雁の事
夕霧のあやしく　秘 夕霧の御中とくあれかうは思ひすゝ
らハ太臣の退座をとゝ申さはゆかしきことにおもひて此文
哉れことより之れのむ座のみまさことと
せきかれかうらを給ぬへきなしのよみ
同 人志れぬまうかなしひらのくにうらを給あらん
私見ゆ太臣の思ひよそうのうちの志れぬ歌の返給
とふんさかしゆ太臣の思ひまかうのふそこかうう一云中
出さハゆかされぬさされとも太臣よりゆしくハゆかされん
とおもひて一云とをいひ出てゆのかのそうてうとうう
されとも歌うし夕霧の志てを給ときと思ひ知りとも
女房も知ろしれうにや給し　也　太政大臣中将定かれの夕霧上

或は女をえらせんと宮のかしこまり梅かえおもしろき宮しりて
何のなさけかと　夕霧の代官さへおもひやうまう時めかしてへんゆかしく
みをとをまうのすえさりしかハさやうにおもひ給ひて後ハ名をなさすよし
さとおもひまひさうんなり
さもきこしよ　夕霧ハ二月の御元服ののち中にこきをいひつとんを
きこえしりすハ雲ゐの居ろ中務宮のむすめを人のまうくう
こまつかぬひれんそもさしつかまつりて
さりつかへりけしひ　左大音モロコエ　伊勢物語真名なき
河六帖　こゝまりれ或しらすさしのかしかへきとりわかしのよ
私そもきこしかのゆかし一年は源さんあれたりおひとこう
むかしとさしそん給ふかり給のしかと
内大臣れ仏とそて夕霧といとりしまさ
出きうぬなり　夕霧れ手まうちをんいつれぬさ御は
うく難さう内よ又中務宮なとのすいさく業なしんそこう
るすまとん母きうしれ内大臣れんよそれ何とも
りれ宮すは　出　中務宮れ御すハ夕霧れちこまうけひき給

こゝろをおもひなからかくのまゝにはべりつ　私云此義也
秘　中務宮夕霧を聟とらむとのたまひし
弄　右大臣中務宮夕霧を聟にとらんとしけるをいへる也
私云右ノ義不審也ハ中務宮のむすめを夕霧に思ひ定給へ
といへて思ひさだめし思ひ断絶とハいふにおなし
又とりてかへり出るの　雲ゐの居まかへ人を御年はなれけるをいふ
人共の知ておかしう　まかせてめかしく雲ゐの居人中かるらん
人夕霧なと人対してうれしかりてあるゆゑかたへ
或御かたけれは人のいふれは　秘　夕霧をいふ人ハ雲ゐ
居の年のはとけられてしとも又内大臣を源氏夕霧なとへ対
忘れかり給へたれしなり
思ふとぞはれとかくれなゆやまかり　字　かくれなりわやゆり
いと思ひ　私云みとをつゝみのかれつけて御人きこし
秘　ま人にて夕霧震通ハすなり　弄
なとまうけぬ人さかなりとそへしかりね　秘　御大臣ハんて
私云気色して様の代筆思ひ給ひ施也おなし年きすりは

三条殿にて源と内大臣對面してまうらしみなれまゐらせし
時雲のくらゐなりてやのゝかしこうにおもひのみしか時の人と
今は内大臣のかたを拝みまゐらせしかは内大臣は御はらをきりて
うへを流れなくて恨とけぬ御事　　紀 内大臣と争ひて執腰
なからは此恨はましし　　私云うへを何れすてゝ下に此恨を合とこ
ゆくへなく　　不忘の思ひもうちしれすとなし
ほとゝしくりくなさんを　　まさしく此恨ていてかく
みなかくの給ひしをおもひもいかにしても
庭よりはなれ右の大臣のにりて極楽寺にまゐりてまうり

行
極樂寺 在深草 昭宣公建立

深草天皇行幸芹河之時昭宣公
為殿上童供奉天皇令好箏給有一箏彈之人其指入作凡件
凡非巧匠之所及自然之宝胸也天皇常令随身給芹川還御
之間忽以給失大敬給召昭宣公被御下可求進之昭宣公奉
勅命起立木路心中被願念云此凡不求獻者今生之遺恨也
三宝可加護念未得之處必可建立一伽藍也願力不空求出
獻之天皇殊以感歎群臣之中抽彼御幼童之儀定有被思食
趣歟其後昭宣公極界を為果他日願念立極樂寺給云々
九條右丞相記云此度啓慶寺々經所東寺西天台前唐院極
樂寺法性寺興福寺李部王記兼平三年三月廿七日皇太后
於極楽寺為先考 太政大臣 昭宣公 及先妣人康親王 王氏追福
修法會云々
今案極楽寺昭宣公建立在深草ト也

秘 奏
榮花に三条太政大臣の忌月八月より深服にてけふみなくすむ
太政の御忌月榮花より同月とみちて侍りけることにいとみしうつり
八月忠 深服八月ほとくあれとされまうく延ってなり也又六ヶ月の服ハ七月
まうくよむうるれ追事ある大政大臣の忌月三月に營花てよりの月
と助うるに誤りし深服延引　是今案從服は六ヶ月として甚
此はり日数をうつさ御假令三月廿日の忌日かうハ六ヶ月としの服百
五十日をうちかくハ八月中旬比百五十日まわりあへし當時と不用
如此数う以下の日数以後者從服あくし定服ハ其忌月ちんうらい
忌日を以てりれを撰服中よ日数を今ノ文御明し今十二日深服
百五十日れう又を見とて引わけく深服せ御なりへし是又
日次なとみにつさらくいまって御まで深服延引ハ多しとある八

・おほ遠くゆくほと之　假寧令服假条云服年謂以十二月
為限不計閏月以上並皆計日　河海抄にみえたり
代々勝載之墓処也　古今に深草の山の今ハかきりの煙と読
るをはかとり唯々内大臣は深草にかたりて
思ふらんれ記き給れいまはひとあり給也
内大臣の歎ノ給ひける也
宰相中将あさく　夕霧も君を給ひてはかなく
はかなくなるを給ひしと
人にはひとゆかれ　夕霧の人おもひさへ
おもとつりあまりは　雲居雁の事をし夕霧の人おもひさへ
見えたまひしと云条此もも　只にゆかれ給ひさるらと思ふ由也
宰相君とましろく思ひけらし　涼より誦経なとしけせ
夕霧ハ祖母しけさそらかしくなり　秘祖母の給ふ事とおはし
冬かく送りの本分と　時もの衍の事のさ由にこひ給へし
たとへむかしありしかたく　此条の奥より月さしてゆる夜
よりけしきのもの衍なり

いとらにこちりく　夕霧の仕業のはかなくみなかれは
人をはなきにとのゆふちゃうかなし　内府の夕霧の事は今の衍を
雲居雁の人も思ひなりてかたしへうちく　給し人はかなく
夕霧の子をかれのゆふかきりてなからんとよりも子や
神とひきとせく　夕霧の神の由内大臣の給ひしも
こそれいかしこちの人　秘　ゆかり内大臣の衍也
孝子　武部更　又孝辞
かくしをへ給ひ　うらの御絶ゆのこと御子ありき
とハあはりかきこのゆかされけれはとらく
になのとかりのえぬにも　大宮のよに入をひけなれハこ
祖母のゆかりと思れ給ひれハ子をそなたにたかに拍そとや雲居
屋みなり下りかり
御法之会ん　私御法之縁ん
おりまくあくぬかのと給ひ世すか　内大臣の齢ひ未よぬかりに夕霧とう
うらりしこ由りく　秘夕霧し
己わし御おりひ宮もこみと雲ゆさし人きを　三条の大宮のゆき

秘 大弐のめのといたくわつらひて尼になりにけるとふらはんとて　是ハ惟光か母也 諸抄ニ見えたり
ゆかしけなき住家に
ませくいふ夕顔の頭なり
むねつけてうちき面風に　秘 心あてにわかくしてしくゆりかふし
おもて面風をよらくこゝにてはかれた筆法
　　　　　　　　　　　　　　　　　弄 人くゝりかゝきおりに面風に ゆりもの花の頭
宿りいうなおりゆく　秘 内大臣の思ひなくまりのふふと夕顔の思ひもやて
　私夕顔のいつゆん居のかくりのすいに行すれとも辛せんするに
　所に今の羽ふうけ給ひし折を雲の居のすゝ何と云ゆきさんと
　心あの中すやなまと鬼や角やとおりしあしゝまでとし
まとはしもり　　弄 世とゝ母す
こちらのとし此の思ひの事し　夕顔の母比の后念すのりて侍し
わさとかく　　　夕顔とよき訳なくにゆくて追へぬとゆん居の宿
ケウキ
卯月治めてら　　　　　　　　　　　　　　　　　七月七夕きまさに侍る
　上旬の内とりふとりて　　　　　　　　　　私云七月よりおなれる
おまへ君の夜の花　　　　　　　　　　　　　　ゆん居の庭おなれし

以中将ゝく給せらえもし　柳木と役まにゆ人宿より夕顔へ清見なる
一日の花の色　　　　弄 深草極楽なまにそれのし 餘情
　或御説よ是より役しくゆん居の頭
内大臣
ちゝやとの夜の筆こきりまうれ母世さつ月やいこれ尽の名おりて給
　秘 弱きよへとゆるしてらね
　弄 私云是ハ惟光か母すとゆへのまんゆき云お花ともれんいうか尽ね
　おとゝハ大弐のめのとし　　中白
　　　　　　　　　　　　　　字 あもおしろきなりまういへ給ん
きさいとおりしろき楼あり
　私云おれ外よ尼常の名おしといゝつれと請まきたにいと面白ときり
まちつけすへつくもかとまきめき　　　　夕顔のんし
近夕顔
なれくるなおりやまとえん夜のもゆきうれ明の光とかしけらハ
　行給旅
　君まうにとえれくよれハ夜の花のめそうれと心のさかしく思ハ
　弄 雲の居父のかうより夕顔を折らそあなるゆかさられた折海へし
　中 まし絶よゆりくんとおきさよかるしくおりやりまさんとや
メソカシ
黄昏ハ時ゆふくゝ夜に縁すり　又一説云夕顔の送へ扇ハいさゝか薫し

いろひまこと世俳情あり并じ　此御説ニ大まかなるみ字なとこれハ
おりふしかへ中しゆるれてまきへ申とかゝれし
秋
あみ字おりふしおり〳〵家ハ内大臣雪庭ゆるしうらニおしけなく
てハまことひさしく雨しきりなりけれハくれおほくかゆるしまへ
ハ知る中しくまことひめへ〳〵さとくし
　秋立年来中ゆるし給ハさりしら偏まかくなりさそりもんとれ
　よきことひさしくおの何事とそめさせにけり作る文はしの詞ま
　くらわりうてそ朧しにはれとかく雪庭立しらる根かんし
黄ムノ大抵中ヘとハ雪庭云々ら詞よりアリ来し中へハ言語ハ所の意よや并ちも也もさ字ハ深く撰せんいあし
くらわりうあそとくしまたり
秋
夕暮の公朧しくゆるさすそとかくもへ申さる後の雪中て戸の内へとし
御作ましとと
秋
なり中ぬの詞をゆるしまへつきさとく
他
朧し
見つりし武ほ弟ハいうなとく
秋
夕暮の詞し
来
弟にたりくはへとゆめるるとまこり相木の作にとこふ春を
いふれすきやゝかれもへしき瓜弟ハ云男とのまで此作といふを
おとしれゆきへり
来
源氏の作前し
大暮れるぬ
語そし
秋
此暮終と源氏よみせるかくまかりゆかし

以上庭りあそくおしまへつまゝや
秋
源何雲為席様ゆかしと
さとましく見種しあわてこそまかりかりしうこども是非見
来
孝をうりし中白
秋
大家の教訓あしそ云あらく不孝まおもひしよ今も思ひゆかしと
あふる孝心の刻りなりとなり
わ
さとすこし秘しとはこるてまかりすこしれはまてそわれにし
秋
私云此際秘ノ義不審さと思へし秘し給へてこれとハおもてより
まけくさやまゝにまかんれのまかくしてあおま承りすりし根を
荻やわらかし源の行し候し
秋
御仏想ひりこよれり移しまかり
源のいえ雅ま行そうまかりけなそるくハ帆しと覚候得ハんと
さりとも師へし気いのおれ哉
孫まな仰御居まけ給ひとし
秋
夕暮れ詞と想ひと庭しみるくといへ一事何まされり
秘
夕暮れ仰くも雲なる庭れけとハ思へともさらゆかしくるめれい
若
是ハ夕暮れ源への体まけ詞し
さんをとはりひさしれけりゐかりならまを
秋
源の詞し
おやくまほしおもへとゆかるしぬ
源れ雲為れけとしけりて何ゆかしく

いかなる人とまことにおもしろく
なくをしてそ何まりこしてかくおほし人〳〵しそうて何ひたまへれ
按察使の事とおほしなし
秋 夕霧の大臣 中納言同じ
秋 深の色し

何 非参議 二藍
出 直衣の色ハまつ此時二藍次まゐらむも同須まゐるさきも同じ按察
議ハ二位三位の中納言なとをいふ夕霧の時ハ宰相中将按察使ハ何
にし二藍を着りけるにしかれは此も同ようの人〳〵しものなりて
秋 三位中将なとの事としてそ何の今ハ二藍の色にのハ似合ぬこと
異 按察使ハ二位三位なとの中納言とくをまさ夏二藍とさしもと
私云 按察使ハ散二位三位多くありし二位三位 中将なとハ 紀模の
或御説に何も此時ある中将なとし末ある年のほとに位の
かゝるほとハ直衣を入るまいりて老なるもの家をまさ 位
のるきへと直衣とりとかへくて深し
私云 直衣の色ハ幼少の時ある若かへりして深二藍
ハ若きも直衣同し也とみてをいつ花田ハ老もとよりん
かくて深きやうに花田ハ青色の色を深く深くうとゝ浅葱田ハ

直衣のいとさく色しくめしく人ハ若うちりの人〳〵宰相中将をまく紀
花田の色をまゐりてハ木の六の人の散三位なとあるくハ何とも
年とり位とに付て浅深の若かへりし年のほとの位ある年
おさかくて此色を若田まゐりし年老ても下次ハあさき方の色を浅
深の色まゐりても若々せられて直衣を夕霧の何位
の人まゐらせくらりて
夕霧の居のすゑ方し
前よ若の色の色をさ紀まゐりてくれしいかとなり
いつ何ゝうつく
色をうれしとおほき
あつしるまつらゆかしきやと見
あつし此君さら中将をとらしめて 七八人
秋 此中納言
なとと人〳〵まさり
おもくおもしひさまつくへい
いかうあり君としるもとて
和方何うき女房なとにのそれらくありて
内大臣の少方女房をさなとに夕霧をもめかしきさせのをへことなし
内大臣の子さらなり
秋 夕霧し 字
内大臣座席なとなりとにし何くもハ給
ゆへ大臣装束して出座すへし

いとかしさくに
あさ座にぬけいく　　来　秋しくちる杯なすとい源のさほや
の我よき海さりぬるとし
くれぬ
源氏寧ろく風俗を整まうるしきとこれをくれるぬへし　秋　源のすし　来
さらくあるや寧き海なきてしたるかれとく風俗をてうんで
とかりぬるし
やうよまくい絶し夏中にくそうら好むし人にあれ何と志こ　秋　たるれてとかぬるやさしる心　光ち源のさ
世の人は皆源氏まうひきめく以まとや海まうくとしうて今のわ　来
大臣の夕霧をあやさろん世のまうひなり
これをさしれきこをも御さり
んまりるあとし　　夕霧ハ儒門より立身ぬ今れたこ　行
雄　そシンクし
おとこ免さりのくしき江源まで御さりうりとて
川流ろいくるき　くタ霧をぬ流すりかすば人臣とし流くなる
ぬますやれにもくしき　大へこれ時儀さらぬ神がまてす　ぬへし
く夜の露を真しるまやし
ちられるのい流れとなく　　来　切大臣れ詞し
冬てとり
かうしかくうち是ていりぬろう　　秋　色毎　イロコトし　探ろうりにうさるれ何れ
むまよりさ江を夜ぬるとし　長まうちるなきうを打まてとゝ　きり
これるの日とり　　　秋　仰しグれ　あるしろ
なれまさきうろ流
玉まとれちも好ひたるる　　行　夜まとしを咲くらる夜れ露
わやしうんまくて　　夜の露の真夜をさくるをあらくいへ
露なまり露の真りうるとりくる流不かり
色をうくこなすりしき由りよ　　行　恋の由りれ露とし
好　恋をとへ也てりぬまんくさらし　来
うらわ恋こ好く流　　光すなく　ゆへ臣れさ海し
月まさしいくぬれと　　秋　おこい皐月一日とまとを流の当れ種
れさくこる其れ先光い七日し来よるんくしより一日(ツイタチ)此とゆく流而白し
　皐月一日比とらまみてくく月さうしあくる光来寿　紙下ハ詞と
七日れ夕月夜とまい流れまさくこもへさそやるよ光を志るすんへし

おとしめられくちをしとおもひしに給ひくはへてうらうらしくも為碑し給ひ内
大臣の碑をはしく夕霧をおもひ碑しのたまひき
秋 夕霧はうち為すかとし 秋 夕霧心しらく斜 砂まさし
さ給ふへしとく
君もまた末の世にはありかたくいさめのかたにゆかしくなりのほとりに給ひ
とよすんひとかりめる人おもひはたくなすんつかうり給ふ
秋 内大臣の御こと
河 天下有識（アメノシタノユウソクナリ）
夕霧をさしていふや天下の有識なるへし内大臣を献却し給ふ
給ふをりしと恨みたし儒者よりも立身の公卿文才
なとは深くうちつらくひとつとも実なり給ふきりとゝんとより
人数給へ也
秋 よろひまりめる人とは家の子をおもくおもふとなり
文藉をも家礼といふをたとへくや　九禅抄 文藉とんしやく
とよをせ 藉を借しとし　問ふんせきともむしんれいとゝも
よむよやまにやとし 一変文字をはゝかりの
一部首云をもんしやくとよみいとまもしへきさん

河 史記云高祖幸父太公以家礼敬之高祖雖子君也太公雖父
臣也又云 漢書高帝紀六年 高祖五日一朝太公云々家令説太公
云天無二日土無二皇帝雖子人主也太公雖父臣也奈何令
人主拝人臣如此則威重不行後上朝太公擁彗迎門却行
上大驚下扶太公々々曰帝人主也奈何以我乱天下法於是
上心善家令言賜黄金五百斤夏五月丙午上尊太公云太上皇
私なりふりしれをしへけるなし　已上河海
茶 内大臣の家礼をゆるしまへくまをかくれをしても夕霧の家礼のみとゆるし給ふ
さおとうしてうつ御とも家礼といふすきるの文をとりやまふす化
人なれとも子まて准しく礼をいはれをとて今の世すきも家礼といひ
きられさへく分ふし れをしつても云ハ大公の家令のたふとし
こしもをこふ云説かれのもとれいのりかしつくせしかふれ
とくへちゆ内大臣の家も猶まら詞も夕霧のためかにはかりのあ
とまへきるもし家礼の醤觴には史記をとりてをし家礼のとくへ
まらくゆるへいあまりにをくしきやしま党し給へなり
異 内大臣をうやまふつきなし皮位もまりて人ますましとし

私

又抄に兄としより不論ハ父子の礼を他人のうへにも用ゆ何れハ家男

新婿なれハ不ゝをもちゐる人もあるゆへとし

義云史記高祖紀単父人呂公善沛令避仇従之客因家沛焉

沛中豪桀之吏聞令有重客皆往賀蕭何為主吏主進令諸大

夫曰進不満千銭坐之堂下高祖為亭長素易諸吏乃紿為謁

賀銭万宝不持一銭謁入呂公大驚起迎之門呂公者好相人

見高祖状貌因重敬之引入坐酒闌呂公因目固留高祖々々

竟酒後呂公曰臣少好相人々々多矣無如季相願季自愛臣有

息女願為季箕帚妾酒罷呂媼怒呂公曰公始常欲奇此女与

貴人沛令善公求之不与何自妄許与劉季呂公曰此非児女子

所知也卒与劉季呂公女乃呂后也生孝恵魯元公主

文藉なとも家礼といふ事を侍りし　義云此段抄の心不叶

今ゆへ后久男の寛仁大度之人にてましくて漢高祖となり此羽

至内大后ハ外舅叔父なれハ父の名ハあるへからすニ男殺すも何の

家礼のとしての一ことなり家男とハ謙退して久男なるか崇

平礼の義ハ様あるなれとも此色ハ劉邦なとと両氏ハ迷惑にも

衷ハ重為居を内大臣の許容せぬまゝ内々にも家礼を信し

羽とも母ハ呂大后を其ハ父呂公から高祖にあたへし母の呂媼を虐

待せしを見て父怨して児女の知所にあらすとて高祖にあたへ

せられし此君のゆへ孝恵魯元のあれ高祖ハ許容あれ

まして内々ハ家礼をせしといふ事をしる不叶ハ此羽此段にも家礼の

此奥まても此抹太上天皇の号のみゆへ人々の家礼をなせし濫觴

此前尾をのせし今此羽あり可味之

自筆にて出し入されしなりとも

なすらへ此をしるへきもよく按あるへし

已上私按ノ内ニ光

異

儒者之教を是とし

孝

必

内大臣家の教の心にて　儒者の心勇の師道にかなふ事也

信といひ叔父なれハそのこゝろの事をふかくなすなり

私

又抄の義ふに存し置いて儒者の心をもとにて見

日本

史記高祖紀

高祖紀六年にて高祖五日一朝スルコト太公如家人父子礼太公家令

説太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父

人臣也奈何令人主拝人臣如此則威重不行漢ニ高祖朝太公

擁篲迎門却行高祖大驚下扶太公々々曰帝人主也奈何以

我乱天下法於是高祖乃尊太公為太上皇心善家令言賜金
五百斤注蔡邕曰不言帝非天子也索隠曰桉本紀秦始皇追
尊荘襄王為太上皇已有故事矣蓋太上者無上也皇者徳大
於帝故尊其父号太上皇也　已上秘抄之内三光院自筆被
加之　此語河海書載之而三光被註如此段之間重載之

いふかひなきやまかつ　秘 内大臣の家人をあやまちなく根の心
思ひなれはや　内大臣の祢し
うらみのふかきのみも　同 雲にのゐくさうしられ家に
酒のこと碑なりけるよふなる紙たるなり
いかくら　秘 夕霧の租也
身をいふかたへに門家御かへりと母また　委 夕霧の祖母を捨て経
大臣よつふへしといふて御かへりしつる大宮致仕摂政ありし
故摂政致仕大臣太宮其母上一品のなゆかり　とかへは母を捨てても流
ふかへしとなり

いかてまれらんしとふと　源 院中の時なれは紅のはいと
より夕霧の人のあはれなる事をこころにかへしと　御ちか〳〵の覚
御かへりぬにかたいとかく　同 内財なくし　相叢書に部ア
御いとときていそらし孔人をりてかりとそ私たちへしさらに
秘 内大臣の時宜なれし
委 夕霧かへりは夕霧を養育しあまて
大宮のうへ慈ふのと　秘 内大臣和し
同 其日さて大宮のうへ慈ふのうらにけく思し出して歎きも知れなりん
委秘 用化川家中なり
私 朱雀と比相すへくは人の心のうちそれて中におもひつ家をくはし
出てく家にて歎きまんとうふらよ内大臣の補しとて比羽者の家
御前の紀を絡ふうくは中物　内大臣の家文を読く柳家の後の
とおくく夕霧の宮よりまつし雲の居を許さへきんらえてり
りくかやもよ　夕霧のいくくさあられて宮をまてかやむ如し
同大臣 家よくこそはうな母を大宮の内まけのりもくうれさけまとしも
委 松よりさきこれをかきくらむ御よませてうちにことはかこつんこ

思ふハ姫君の様ならぬ都なとこそ川原しとし
秋 雲居雁のもとをかれぬかゝし女をも思ふなるへくいふ也 松なり先
この段をまつのうちにていへり 松を御よそへせられ女の御すゑ
られぬまよりて誰かいはんと御事とし
花 かこといひやすとも雲井にゆつらんとや
私 下ノ句ハそれなりけれはこそ此のたまふを御心のなさけなさにから
きおなしん心中にあかる雲井雁をましけてあかかといはれ
にゆかりて恨らるも あさましとや前の御へしかへの前と思
ふこゝろをもさらんと云んにおもへり此義そへんにかなふ文字ハ
極めりれ公卿云界の人かゝるに逢て騒かしきあつかひとそあれ
ぬ中なる所に達恨もなきとあらし 初の説よし

宰相さらつきりあやしくかしつかれたまへりし
河 御前新宰相に大臣の宣を御云此下御かそてなきて御りて宣を
あやしく撰定かし付当ノ雄数ん
花 大宣とのりてハ座まてつりて執筆まうさし是ハ宣旨をうけ給

わらわ冑の家の作をわりしるへし
私 内府ハ御舅とし又唯ひとれの中女と請く 会かへし給 河薬かし
夕霧 いくらの籠事をもしきらく思れいきらくおりまわつらん
河 紫宣集に通ひく消息にかれ人の心つきなき御ぬよ見ぬまこと
いくらの咲ちらむをもこしつゝおあひくれ見にあらん
秋 おましれ国をなし河なとし花のひをとらくいなりのすし紫宣か歌よ
いくらの咲しし河よ重此奇れ似し 花 ハハ雲のをゆし給ひかく読むき
重をかし以来すさうしかふし
以中将り給へハ
以中将 若きをやゝれ袖にまつへ河若の花君かへりやゝ若を渡さらん
河 若きをやゝ婦人へ見知ものを読み 文年弱女人 多早夜来 幼婦 一万紫
秋 気色も雲井雁に思ひよそへてよめり 兵日
夕 夕霧なり雲井雁の蔵人をまさらんとの申し枝へ
河 浮きしまへんなるらむ 花 巡流し 花 礼義よし
浮きしきしなるらむ 彌流 私不用之
秋 きんしかくれく彌し流と云義なとこしるへし
点ハのまゝ此君なりくしかくこれまいて次

名碑中にかく見ゆれはよめつらしき哥ともありとしいへり
しもちからといふ菊あるへしやこれ翁のすゝめにまよひ
七月の中の頃よりよミかくの名まよ
秋　同月七日の夜　庵にかくみえたり一日此といへるは上旬也と云なり
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　同　月七日蔦　魍　初子
まにまつかのかれ名構とそれ
　私云　前の翁よ月をさらし出あれとも此文をさるにも見ぬ
　なりたといへるをそしけるかくいへるにこれ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　秋　もなきをかれにおまつりし
益のさ海の頃のなきもく　　此頃よいへるの常　若れるよし
弁れおね　　　　　　　　　しろ木れや月の梅大臣の都へ行きし人なり
わかれにつてうらふ
　　　　　　　　　　　　　　　　　葦垣　催馬楽呂　何かさゆき
うきるとるにあり渡とおひお渡とえれ　庭でで出そとをさかれ
かこれもくとあやよまさよしつ　二度めしゆるしとて後くまかは此あれ
三よしいふあれ人年かまうしさん　まされ　今庭の翁の出あなきこと
まされいなきつくまれかる　今段

秋　河海に死せり今かうふかん八夕寄のくよりかれ男を親の字をや
　みとりあしてらうし　　芹白
さゝくかくうらふを肉前に字やさしりとの々し　へなり
益　わか弟れあの八男れのんくさ九らの女をこてもありひて字れの代をとこえ
てかのうとさう女れ親よ若ある人　ありせくなりをとまれ　若の人
とうらへあるの弁のおね今此の　をあつてよせうくこうへあるさ親とあり
なりくまやなすも後のけさつれあわうるをれあ　ありまやに八化は字
いかおし此翁れてまへし　若よい佃すの不をもなくいふへあのいてあ
　今やに此といハつりされなむし　おれよいの此あれをさかし此物に
をへ海し古人のとる代の寿れ翁よる　道まかかとこ翁なれなら後
　から此あるく　まや例の居郷してうくのもにある後からを笠　郷よ
けうしてう弟なせるといふへまうしつよかたるとかきにおさへかくと
後からのとのとむくさてかけるに字れおらかれしかの　をいへて
いときやなうも　　　　　何　常ね　文撰　　　呉　らしなまあとのあし
秋　てまめんなるとゆへ居の宮しつかなり

万　やよく知りしとれ書きてうらん

ぬしいよらうこれ歌のと　　何　何しうれの歌に古注はにほとに云何

なき人後仕大臣古注は今の様曲を今感すゐしいふらんく此仕によるならん

集　ごく論にるを出保ちぬとおる〻こと此物語するをしらるくはまさ

うひきまりのすゝし覚しそれしゝ新しうかぬしくもろの謂ふ

万　ご謂にゐ歌のさつや有れそれ何く秋云ようしうしひしつゝなり

秋　是見るとこう論きるを年経ょたうると展将書写れ序のかくたてあう

身やうさられへてうてひのしめへし今秋云れ序の保ア見とこめる侍

とかれつひまへきらすりと年おの物哉を見えなくて〻まれまよ

うらアへきとおもりしくゆ大臣れてに志とうつうくうてひ〻めるに

なるへしゆのこれまうきく汎有のうつれうらうすも漢歌は何

知見り文色をなまうても新経ノ御当書ノ約を知ょまてう云ぬれ

よくえ当れ読ともわれぬさ御り用く〻いるみぬやしかすは通

ぬし出写れ保りといふるへうられ

ゆおすひおしんれ　　　りれの根も一年すおりれなすめりとし

いんぬしそくなやしとしてく　　秋　夕霧

　　　　　　　　　　　　　　　夕霧れ詞

とうりれ地いとゐうゝゆくうらく

まうそんそうしもるとく〻ら　　万　ゆとりしいおとらかしろらさ

何　なけきこゐ人への山のとのうえのやとりしたもなけれにゆかろる

集　何海に秋らは拾遺の歌にをとしはうくもぬりにらかは此知りとくさい

うちくきあとい不依のにせ度ノ詞の口とりしうへ拾遺今一首

文作りお知さ札ぬくさ北御のまは〻しうへ云へれ

とうす御れるてこれいとうふへしまてきんてらやれも家にうれ

よにの字もおう〻論しうらへさんまなれ中物れいうるもやまき

詞りし一定せるのらにょりてく用ゆへきてす〻

ごれ外やゆつり　　夕霧れ源中将の霞本をとう際ノ経へ当るは人きとの

あそんや　　何　詞為し　　秋　おこう中将さうしうく家えり

御居れとこれ　　夕霧れ休息所とを用発せよとと

おきるかしうてう　　大たれいつうう歌をとうして此のまへうつ紐

もしう他の仏　　　長孔なれそし

中将家の紐を札ぬゐひ称よ　　源中将の夕霧ょりかの紐

秋　わふるすうとりふ加し　　ゆえたれゆうし　紐くうとこて

私云大方のゆふへ旅の心も思ふ旅の旅ねなきと様よりいへり
心のすみとるは松中猶れんはくるしき事とよへりと
松よりさへ山風はあらしの音をは　夕暮の詞
に　ご紀ハなを松よりさきに行る旅なれハ宿のりにそむハ哭合
秋　おりしろさそひ音し　月影に行よ回し
守　行くさきはまたしきさと思ふことゝそいふなり
ゆふしやと　旅の旅孫なすそわたくそいひがたき
ゆふしやといふらくしさらくせあすふらいなるへとつゞくし
中猶ハ仏のうちよ●
寺　松中猶し夕暮のうつりよりそゝいはりみゆる
旅のれいさやと
秋　松中猶ハ思ひしのほりけるより旅くし思ふ
人々過れ思ふ宿よ　夕暮の行すにハまさしく人へのよ
柏木れ思ふゆるして座うく旅ひさるとし
うし後あるくみち旅まり　夕暮れ真と寂へ仏雲の
為よ旅る人きへとうし後あるく松中猶のあそし
おもこ思ハ後うと
秋　夕暮し
行か兄いとくい流らし
秋　旅思しるゝすと思すてゝ

義云ハ流しくハつきうしくふあくおなしの旅ゆ
自称するへし旅よゆ大名のまゝけ旅へつう旅し
私云此義なよし秋下へ三光院自筆にう紀今仏り
又ゆ又云内大臣のうしょりまけらゆるし旅へつゝ宿の夕暮思
面白らしく旅ん起りて志のうへんとこえ此義なこの国
又付句等ハ此推量しくうそのうそ経
雲井居れ色
女ハいとゝゆふしと
雲の居れさ風として夕暮れ思ふ家に来よ
あかね不なくめやこし
いろけれくてすんハゆりそ行くも旅ひとつれありて宮ふる
世の世あしりまも
秋　夕暮れ詞し
に　意まりよえぬるれとハきくねくも世のうかゆりしにもかりめくき
私云字よる者ノ分と引秋こハ不載し但此り分面白
意まるよえめりたれしとハまうぬうあハ意もあへんとえら月
知とよハいましく世よなさくか世かしかんとあうと思の情とハ
なりとくしてかしますても
見ち夕暮れあへかく雲為居ましるこ

心ひとつのみならすしも侍りあらく御いとまもゆるし給へと
奏しきこえさせ給へともみのして
あまりさとかりけるねたさも　雲井雁を根にする詞
おほかたのまつりのことかたおもひかけ　弁少将の詞也
内大臣さへ宿やまうちとけ給へることゝ夕霧も雲井雁にかけてかや
いふ紀ねしやふ　云　うらいひきこえ給ふ事と云へし　弁少将おほ云
秘　いひつけいふひさう人すりくし　すこうらいつけさしんと
葉　いふきいふしくおきしめくうかとおほちすらははよ新成ぬ
云詞あれ此大臣の春の夕霧の数仕大臣よりも頼ひしみれ頼よ
うちひさりけれしる夕霧の心にいふ下すやちうくのくちまひとう　宗
川口の上抄さしいとへまかりうかり侍れ
河六帖　くらの実のつのことのかしもしいうくまゐ給ぬや出かり
河口　催馬楽呂　河口の関のあらかきや実のあらかきやまもれとも
まれ　一匠　まもれともいてゝ我ねぬや　関のあらかき
今の心は垣のまうきあくかうしはすとおもやまましとを
夕霧の関のあらかきもいてゝかれねぬやとこれ

いはぬ事なりけれはむかしをおもひ出るなるそれを女中君と思はれ
云　弁少将あれおもかけとうこひ時夕霧は河口の関を忍
うちひたてしと女すゝりのすゝとやすらうと云ひける実
あつかひてく頼りしよもよ思ひても衣とうちし帥を
新道ハ忍かく結ふ始さる所をいつとさんかれは女の中のふしと
夕霧の心あちけあれは雲井雁にてかゝる新のをつてにかゝる
英　ありしも詠よ新のよしよりてかけなとそれぬとよしたる
秘　河口　催馬楽呂　河海抄に昔はとしいとかりといふけもいふしゝうまへすり
そも詠まれけれ許しおもてなし一にある代のもしにかへりき
箋抄　三光院京　川口の関は伊勢国也　花鳥、川口の関の事とあり
私云　英　秘ある河海の説と花鳥の中也　又同し九禅抄又同説
いふられ我ねぬや忍ひしあそと云ても何を河海説面白し
雲井雁の浅き名をいひしかゝ　父名とよそ侍さ頼しての
なきいつる詞のさ頼しも更に思ふは河海説叶へ侍ると存る
但英　秘　皆て是も不用事か

女はとこてふことと　　雲ゐ鳥のなと

わかきをいひなしけり川口いふくもして哭出んおもしろ紀いくちなり

女の哥に心浅き名をたつ門渡は河口の関の名もあらはなり

ありしのみを思ひやるへし

雲ゐ鳥の心浅き名とは雲ゐの親のこととり夕暮の浅くいひなし

なりけるに関はやすく越なりとわりいつかのをとこへろく

語りはうけりとてとは出して心の様ゐとなり夕暮の若人と詞れは

やすくへもいふくりしけんとおもふへし

雲井鳥の心知らくをて渡さしとわか中ふいふ根よりしかす示姫

家本説とらく或人云花鳥ほのうとひよおもやよりわりかねへと

うらひをも弁におもうしいりれは逢た夕暮は心に親まかさかね挿頭けり

わひしけんとるとかんしそれを渡さぬ名をいひすりへらかいさ

やらはへめりしまうかそしと女の中のわかの心し

わさ関とるふのよ

雲ゐ鳥の羽うちこみからさ渡し

心ゆへさらり

太庭したはふしあわらうへし

夕暮のさ関なり

まこうしうりをらしたく

夕暮ともよくたの関を川口のあさりけりさいおかせさらすん

同　菊多剗開　亦花鳥云奥陸云ミニ於同剗八関剗日関ミニ　俗ニハキクタノ関ト云

弘仁式云　　太政官府

應給考ヲ陸奥国外散位三十三人事

擬郡司廿八人　　白川菊多剗守六十人　自余署之

右直ス国府外散位等如件有宜衆和依件給考

延暦十八年十二月廿日　　花鳥同散

今案男の近心ゆくしてやうりと云奥州さくらの関しをのへ人はは

まうのなかしの川口の関まの浅さきとと云名をあかせさうへきと云迄

くもつきの関葉に奥名し菊多剗関し俗ニクキタノ関トなきことに是実

それもりかつはなう心地されは渡さすのとりのにはかくいかなきさに

くもさこの関きてたゆし　　くもさこの関を奥州しさりて出きすか涙に

こち哭もとり出心のきをもあつひもかのことえりなしへ名をも渡く

いひなしららまやあわれと若う心に文花鳥にあてりわりかき心の名の

何にとなからしてせへし語つて庭をしとうして西日かもし

一説弁おねうとひし心をわ夕暮の女の歌よりひりうかへかへ答て

うらひしと夕霧の哭のわり侘ともあらひしと安芸の浦さ名さて
藤かとうろく文ゆうとと夕霧ろくに歩う而と西ふ雅り
ありり浦くはうりにうりありのまゝ了首ゆて
忠ひようらく
表前洗解の余氣なうろ白きらく夕霧の私ゆそうに
わく浦も云くはわかり　同 本もしらはわく浦さとては夜しおもし
秘录考出不被之
人くさこへ身ろしへと　さうぬんへもれ何しとらりわかりて
おらし云くらわかすれ私ゆろかと　那人ほれ狗と私ゆろかとかはは逢
丞 わさぬに私渡りて
されと何しうさてれと
秘 わうしうてれとさとし　丞 わしもそくてまた出来のふへて
秘 くろかれのうはわさうか　御説兼り篇と同し
む 六帖命のさうかと人の私かかよ云わしうさし　录 夕霧のもそらくし
秘 くろかれの私かれ丞状霧におりうへしつるへて私君の那
卿文は秘君ひさら　秘 りとのそく秘君ひゆて　武林刀家河海

中くもさ一いえ出のしゆうれと　丞 此霧に思ひしもゆ文由にひきしと
久しそ中くもそうらかふかくまらくとく文出の頃ろくいさう
逆りもしかやおわかひうら侘後逆なそらいつさい云ろひく笑ひろと
录 雲の鳥そ私いろうしし云めふをろうぬなり
秘 思ひし時よりりを中くいなりそもも云樣ひふくらかうそて
世ろりみりとい女の心おさうとさかつ下ゆうれんかに雅絡りよ
渡らせさらにゆ霜しきて　丞 世い夕霧の女の中れ狗に渡き
录 あわひさゆへさんん侘し鉢かとうれなり
秘 つきせさり行西に女のみて絡とけれなり
录 夕霧の文の狗と渡れなくいまし浦そそしし
まこきて女后さとさと　录 此おもれ心浦くしてにくへ恐し出由
こうむろよ思ひとりし云りくやをいそさまふあらかて袖のさ行くを
此年月をも思ひしま袖をと云りしうとも絡りよくそろさま
おうらかけて侵しも云何くもとそのつうしいうりてと人をとらめ
みしとひをは浦ろかい今よりかへ家とろくりか浦きよし出来ろり
秘 今よりは云のふましけを也

いとまれなれは　　夕霧の大臣の論をとりてかくなり
うちあてらく　　秋 内大臣し摂籙を藤氏に弁しめで
むね花ハおほくの羽をも文の羽まてきもつけ給ひて摂籙とはおもなすハ抑しきも
世界の名残なり　　むね花ハ日月の恨ハ露もあらんとなって
秋は羽草の花なりへし
御息所いつく紀うてけむ代見えくしやてさとおもりしとなり
のへきをうかなれは道より給ひぬ
雲の為れ逃ての兵さへ今ハ上よりておなれは大臣さへおもし
めれなれいおろしいつくこのきいつくおもくおもしろくうれ本の人をきかす
と雲の為の御中にと暮しらく高の弟への御子にて
御はらひの後く　　後の文の任には禄をあたへしなり
中納言をしき後に　　しハ本の位をおもひたまひて
のまはむきらくし　　月も見ひく文の行はかり時に
右近のとしなとらんの　　右近ハ監いまして叙爵せさせ給ひとハせうしよて
夫夕霧右中納言右近の監かつきさんたてくも只今東右近にておはん
六条の院にても　　源氏太政大臣

宰相中将よりも　　夕霧なり
すさいうまみなまと　　秋 源ノ相も
さらに紀へく女の世にうかはさるへくあへしれへしまへらんと
[に] 寛平遺誡　　左大臣藤原朝臣者功臣之後其年雖少已熟
政理先年於女事有所失 時平公也　先勤し
人まきくうへのひとつにてまことにかたくを色ことれしかりつれ人あをき
御かたの御仏と御用ゐ給ひ　　夕霧の人心は源の家をつきてなり
内大臣れはおほよ定ろく道と右ひて上ひさらに論わたしとなれさきれ
うちかりいくはかなとてたまし給ひり仏おもふてもおほくうすり
おほは中将くれわまりなくえんみくあさおかなくもつりれやりとみえん人
たいひろしのてれおれへや　　内大臣れ霊神に怖りとしく
麻鞋のさ論かりし給は源も服立れんはこくて深まて怖りれ
夕霧れんかのもさめくにくきをえなれはをかりしうてふやしてまさ給又
いさりし給は後は内大臣の前よりなまけくて許のすなは世人まなを
はりとて敵へしうるやけりよからわりよ仏おもらりしくもらましきいんまに
え人なすとりいかまる　　是より夕霧は人おもさゝくとれあまて

是まてハ皆夕顔の事この理運をしるしつけたれは先たんなる事と
んおもひとりて女こそわかつらしくおもはしくあるとめ
きこえしたにんなとしるしつかふへし
さてそおつしにおはしますらんおさなくしてよめれとこそれんなとえおも
しられくせなく人めしかくきこゆはきおもつらん〔へ〕なとと
（朱）内大臣むすめを源氏の北の方にてもあさつけたる女くしきとし
私内大臣のむすめ源の室となりたれはやさしく此夕顔のゆかりなるを根（おほえ）
ふとうらわひ　内大臣との夕顔の御中むすめを源の北の方となし
御子のきみたれは（秘）此子ともえてさえく源のいとくおはしまりとし
おもくみゆとそ　或説御説によりてこれは夕顔の根に
ゑてありし御前のかくいふゑてしき孫の人〔第一人〕おはし（御とも）
かくいふを此御うへ三条わきさゆう
（公）うちよき直衣はうへ公田に白きさ御あへハこそはねれさわかましく
（朱）源氏形の女房公田秋より文れしはさき白きゆそハ直衣
宰相夜はいらさふしゑくつきさりかけこゝ丁子染のこうりてまうく
（り）西のたいの大臣六月にハ丁子染の帷を出ありけるよし同記にとゝめ

（公）是にしたかへつきハ此紀公田にこそあれやかてさこそあさうてかうそいかなきとそいし
（秘）丁子染おりさねし
（朱）夕顔十九の女またこし給て丁子染のこの花色に紀せり荒木子源語
抄ニ丁子染流よりあれわきこりぬし丁子そうきこゑとハゝ白し
文の守人〔きこゑ〕やとよむ又丁子染ハ西の文たる大臣の所公娘（源の）
ふゑ梅なとハいはすして丁子にこく染めし
私云花色よりにて何やらの御説ノ赤にハ白き菊やらあてこて
やけむことものを丁子染なく又白きに何やといふ事不審に
白紙わやかにこそわや
（秘）くはん仏おかりかんしくり
くはん仏のあくぬてまつりかく
（公）国史云仁明承和七年四月癸律師伝灯大法師位静安於清冷
殿始行灌仏事　私勘云公事根源抄云灌仏四月八日神事
にあたりハ延されたれは灌仏を八日につき御神事を始られ
事此毎座の北の座をされは畫御座をてへしその何とすあたりとを
為あての灌仏の生れかはらぬ表を作りて永あかく鉢をおかし（公）
くれ作り抱き小の方よ机をそうく緋のあつつよる文おれみへて合

是まてハ薫大将の理運にもあらしとおほしはなちてけるをも
んおもひけるを女宮にもわたりつゝしくおもなしとおもひしに
きこえさせ給ひしなとしてもかひなし
さてそおもひつゝしにおもひなけくおほさるゝにもあれはとうちにもみえぬ
しのひくるまさしくおほしめさるゝ人の心なとき
弄 四の宮の御かたを源氏の宮にあつらひおきしを女くしくおほさむ
私 内の宮のむかしを源の宮ひとしくおほしたるほと薫大将の心ならひにき
ふさうらはひ　内の宮とも大将の中のみかとにて源の宮にまさる
御子ともみえしに　私 内の宮ともみえてさらに源のおほかたにておほかたに
わかくみゆくを　或抄御説にはおもしろくてたゞ人にまさる物の根に
みてのみの御前なとにハいひてしきなり人〈京人〉〈二人〉おもひしのふとも
おほくハきこし御かたにいはんやきなり
孟 うちまさき中夜ハいまた北宮田と白きさ御袍ハうちをねかへさんねかはし
弄 源氏所の女房宮田秋にはかならすさこ白き御ぞハ中衣薫にてさをね
宮但哀りきまかしと思ひきこえけるにたてまつるも丁子染のこうてまつく
河 西のたいの六月に丁子染の帷をたまふことよし　同記にこれ

孟 さうしあつきにハ北宮田にこゝろはへありてうつらふてかなきさとおほし
私 丁子染のうすもの
弄 夕霧十の巻に一つ丁子染のうすもの花鳥に花鳥薫子流染流
抄に丁子染流よりくれなゐにかはりに丁子をこきに以てまつり
まうちくきさまやとまた丁子染ハ西の方大臣の御公始く染めて
ふかく梅なとにいふをくてに丁子にて〳〵染めよし
私云花鳥にいにていかやうにも御説にかゝハ白きこそあやとおもひてこそ
やうかはるおもむき丁子染もくハ白きいかやういつも素には
白きわかやおもひこそあれ
くはん仏のなくあそひてまつりつく
私 くはん仏おもひまうしけり
孟 国史云仁明嘉和七年四月請律師伝灯大法師位静安於清冷
殿始行灌仏事　私勘云事根源抄云灌仏四月八日神事
まゐ日ハおこなはれまた灌仏このときに五日より御神事を始められ
なれ毎度の御筵をとりてかしこの所にあてゝ
あそひ灌仏のうまれ給ふさまを作りて魚まつる綿をおろし
くれ作り給ひて小の方に机をすゑつく物にまつりて本尊のことも

云つ集りて殿上にさふらふ女房の布施をかくのことくに給ひ
いろ〳〵に付て風流なることを尽くして屋盤におかれ
出されは蔵人とりて殿上の台盤のうへにをく上達部より布
施の事みつからとりてくれたるのちはけしの人白木の机に置
て次第にをきなしたる御前の所布施を紙につゝみて不断の人布施
蔵人をして御導師の僧まへにおかれて仏前の作法終りて後
のちこと一度にくたされ合て先御導師灌仏をおこなひ終て後さかつき
をさし勝負のこと〳〵さこそとりて後をして灌仏して後乱仏生
導師布施給て其のち仏生会は推古天皇よりはしまり釈迦
如来の倶毘羅あらはれ生れたまひし時天龍下りて香水そゝき
て釈そるにあひせられしことなり

私云是内裏にての灌仏の事也親王大臣の家〳〵にも
仏法多かりけり　但大臣家にせしめん為に給し　かはらし
佛生会よりさかりくはへり

かつれのまへも布施なとも出し為ん女房の布施をも内裏に
布施なとおほやけさまよりされ

釈王大臣以下布施を内裏に

同灌佛　四月八日

布施員数　寛平八年四月八日定法文

親王大臣　銭五百文　大納言　四百文　中納言　三百文
参議　二百文　四位　百五十文　五位　百文　六位并童　五十文
親王大臣　銭五帖　大中納言　四帖　四位五位　二帖
六位并童　一帖ト云々

日本紀云推古天皇十四年是年初安寺四月八日設斎会

私云昔より諸寺の仏生会は推古天皇より始まれり灌仏
ことく内裏并親王大臣家にても行なはれしは嘉祥年中より始
まりし　仏にみのわたせたまひけるは何

灌仏の布施には昔は銭を用ひけるを中古より紙にかきれり

御みな灌仏と名付給ひし

おほみのさかりしとりつとめ　内裏にて行はれ蔵の仏法
うけたまはりしきは御ようも　是を用ゐし内裏の事をいふ
寛平は光孝御門いまいくさかりし　是は久寿の雲の扇の方人
いりのすゝくのさ後なり
日はとなへねとなさけいりのこゝろの人をも

〔弘〕夕霧はこひしけの上女房のなゝり
〔弄〕夕霧にんきやけしくへなり
〔秘〕申つきりは一ふゝまさし御りの上をよう〳〵めしとゝすゝへ（雲井にとこ）
私云是さしをあり称としいさしくんさこめそいはあかめへ（いか侍
雲井のゝ上ぬしのゝ上をいゝて是は夕霧の乳母のうをいゝて
とし給の御りもりそへく　〔秘〕ふとゝろに夕霧のうつとり
給し給いさうをいゝりとなり
いふやうなるのしひ　是は夕霧と雲居雁とのなかを又源氏の
大臣のゝ中かねんきの（まゝ）ゝさゝれんとくいゝり
あをきらんや　〔弄〕御方のれんとひきゝうくいゝり
〔河〕いかゝかくわたくしにかりまさんのりさこしともまさりめと
〔弘〕あそりぬといふ出国あり契とをなし不退と云詞なるへし
あかしれおもしもいとしきたちなゝかさり　内大臣は夕霧の猶に
てもまさりにくうりし可然へしとくりそりしつさゝなりて
ましめたふしれふちおもしさは極めわせと痛くおかましめ
是なるはゆへ宮れ性をいゝり

あなあやうの御わさ哉　夕霧のをかしきおもかけはしるき
とゝめてりておりひくいふも恨ともおもはねこと
女御の御方さへ何なさけなかりしも
女御をおほきいとほしくおもふさまなり　〔弄〕
〔私〕女御は今上冷泉院の女御也　〔弘〕弘徽殿　二條相国の息女
〔弘〕二条殿のむすめ雲井雁のまゝ母也
〔弄〕女御の御母は今按察の北の方
〔秘〕雲居雁の継母也　夕霧の為にはかくてぬし
何のくまなしかゝるとかはわかれん
わせられはかくこそあるよ　〔弘〕雲居雁の実母　〔秘〕弄同
〔私〕雲井雁の実母は今は按察の北の方也　按察の北の方は内大臣の
あるしこにこうましと思ひきり
うしくぬしくかくしきへしなし内大臣と心うくおもしろき雲
井雁のなをまさく内大臣の心を嫉しくおもすへし　明石姫君の春宮へ参り給ふ
かくて六条院のはいときき
昔いのり人みおれまして御ふかく　〔河〕賀茂祭前日於斎院庭上

有神曰号御形御阿礼御生也　見古語拾遺　日本紀云神聖生其
中者或御禊〈ミソギ〉　祭のまへ一日を御禊といふ御生所也
斎館よそほひ　祭の時の御膳ふし
弘　このたひの斎院は弘徽殿の御腹の女宮とかやさしくかしつくる
ほとりんおもとのわたることはきこえたるにいはる
出羽ころきよりかりしけ人〈ろ〉おもて御所とも〈ほ〉まうし斎院八九も
秋　紫上は時の紫上の葉ものさりし若葉よりむかしそれおもてし
少　世俗御勝と云是八かれの人そきとかをまの領し御せなお
別当殺せ御ふこにかれの斎館〈は〉紫上に余りなり次の何々なり
達い御こし　多れしとをさかひ給へ〈ゝ〉を紫上れいさかゐいり
おもしまこ人をいかよそやおかく御をもとなひ給いねし
御車せうりしく　紫上れ女房のこかゐし
ゑうひまつりの〈ゝ〉とし　さしてもなをめ人〈役〉おかくいおもて〈ゝ〉
く〈ゝ〉しき人〈ゝ〉す
気れれ日のあかつき　弘　紫上面々日れ暁まいりてあつて
〈ゝ〉さは御〈ゝ〉れらんとも〈ゝ〉き　このたひの人〈ゝ〉さにはまし紫上かへら〈ゝ〉紫上みすゝ

御さじき　御禊役おおかへのうゐし
ゆゝしの女房　前の日にはかれしも供うひまつるのもかわ
　此ゆゝしくとまへハ紫上と明石姫君らのまうと〈ゝ〉へん
おもへ〈ゝ〉ひなしやさるへきと　此御禊役のおまる車とうてまかる礼
これにをよとこそやまり　余所よりかゝるも必そ源氏の紫上申ん
御禊役と御いかゝまうさまし
たとへ中室れは母らやをほ　秋　六条れ御息所の〈ゝ〉すとかくし室〈ゝ〉
車をとらせらるゝ　ふと避〈サケ〉られし車何事そひの時のさま
時よりかねおもかうりしく　源氏の〈ゝ〉よおとこまうしにんと記
〈ゝ〉く〈ゝ〉谷りいまし紗人紗ゐ〈ゝ〉なまり
こまひく〈ゝ〉おけら〈ゝ〉〈ゝ〉しよにをなけこさね〈ゝ〉ておもく
秋　葵上のまうし此まの雅にても宮ひ出れしは禁忌されいいひさし給し
〈ゝ〉くなすりにをこそまれをとそれ給ひ〈ゝ〉ちく
少　おのきのゝ〈ゝ〉をあつまゝ富〈ゝ〉まうし記すかれ大云さうしおもて
　是秋の儀とも申し記人但式部が名のみかれ宮ひまにとらと
式部云其こおかれとおほん山の菅おもて〈ゝ〉は〈ゝ〉て〈ゝ〉おかしてまいらせ

但舞ノ曲なりけるかな

騎りと御覧ずる人々も　六条御息所と葵上との子孫の所と定まる

中将ハう　秘 御息所へまくおもひのことし

夕霧ノ事　秘 秋好 中宮ノ立給ふ

家までひなまでいまゝ

まひなまで（ＭＡＲＫ）

まへくいと源氏世の中をみすてゝにくいかなり

かさりの世とまくさ御かりしと騎りんまの世の中とかな

おとろへまさとさへおりいとく御覧にとうてひとく

此頃ノ弱ハさてかならずしもたれハ我よ須ると此頃のんハ前世の

息所と葵上とのまことの板世なれ定たまいて前世のことし

ゆくへハ源氏のんのまゝに栄花をさしかまいてまへとまり

来よ騎りぬりん子孫の子かにおもひのまゝのまとかハ繁よ

けらめいりん物へし　祖家の流れをもおこりて子孫まで

皆がよんのまゝに栄耀をいまさねまとと此上人ゆうまの弱とえ

と生絶まとも卿さしおりまいりつとひゆくまハうれしき出給

葵上の検非違使より源のさしきへ出まつりかり

秘 此ふ上の検非違使より左近へまいることも源氏の威勢の権威

左衛門の佐とは中将かりたる事

伝 賀茂祭欽明天皇御世天下挙国風吹雨零爾時勅卜部伊吉若日子令卜乃賀茂神崇也撰四月吉日馬繋鈴人蒙猪頭（ヰノカシラ）而駈馳以為祭礼　以中将を左衛使例并左衛使之始可勘

秘 賀茂祭まての祭の使左衛門司と申らるゝハ東施とも御座なし

舞人陪従ハ左衛門の被官なるよりて祭の使の出立を見る道立よ

さ（あ）しの儀式をまつりのし

吴 同賀茂祭の使の祝の一勤とさまでも伯[illegible]子息中将為代ゆかり

車をとゞめて東施と真ハもちゐる事

柏木頭中将の家の使より門内の在の

これ大臣の家へ出す

より出立しまれはとて道のなるとみとみつゝゆるゝ事まて此源氏の検非違使の事りし

夜間の給ふものけも

秘 惟光かもし夕霧のわりけなる人なり

伝 惟光宰相の女

御前へとひつく　惟光を源氏の天下をとらせまいらせし世なりし事とかくあるへし

夕霧藤内侍れもけ出立とらかひて
夕霧藤内侍見ひさら中れゐて

宰相中将出立れ衣よさえん
うらそけをわすれおかりし
かく座んてらかきらへに
くやんともれてらうよさうこ御り給ぬをとゐかるれ
秋 藤内侍れゐて夕霧かん雲井なりけり行こそれなりし
夕霧 何とかやうにおもふよりいそつかわかくまかくをなりに行ゐる
花 久しくわかねんにて
秋 言葉わかりをいうりのいそつかうかんつとかり
少 きそのうさしいわ子ひをいへり
ありし夕霧れ宰相中将藤内侍をえてさう子む給ひけり己を抱
藤内侍 尋りてもかしうるゐ 草れ花やうつをおゐし人やたすん
花 折桂ハ夕霧おりとの文章生にうくまりしるをいひて
秋 文章をといふことよりうるりかりしゆくりくいへり宝也つてゐる
新勅撰 久かたの月のかつらもかくゐ藤文章よそうれゆくりにいく世ふるらん
河 晋書曰郤詵字広基挙賢良対策為天下第一為雍州刺史武
帝於東堂会送問詵曰卿自如何詵対曰臣対策為天下第一

猶桂林一枝崑岸玉今以之課試及第之事作来也
拾雑上 菅原大臣かうふりし侍りける夜母のよみ侍ける
久かたの月のかつらも折るばかり家の風をもふかせてしかな
あらせかうくいと申されり
秋 桂れ葉ふ風し揺せりしよせ久るゐもわり 中古白
河 葉風 桂の葉風揺士にてそうさん
日 そしかるよってそよく知りすへ公にて夕霧ハ及第れ人の仇かり
いうなれを称さ記いつへとおかれに 夕霧れ尚中に称之記白
よいつへさるをもふて
なにのゆ侍して 秋 夕霧れんにとよわ給て
私云後よ仕服よ君つらいハすこあたり 花 生とれゐさ
うくて御まりハ和前をひのよつへきと 少 生上のをひのよ不慮さとて
秋 明石姫君八日れすし 源の仏生上久しく心よ隠さうかひよ不と給て
常になるくしらハ 花 明石上 秋白 源のせうより給ふ宮にて
うれ御うらみまや 生上の彼とハ実母なれを姫宮にけし
うへも後ハよるへきことれ
れうへとかくつまさへいまりきとのわかり

うれしく思ひしに
此御ふみを　わしれ姫君の御かたへとて
秋 姫君に紫の上をさへませ給ふへかりし程ハ何としても実れ
母と思ひしくおほすらんそ給ふへきこと
此ありさまへわたらせ給ふ　紫の上のみこそ源氏の
の姫君なりとの心中を書しるしたるなり
まことにうれしかり　姫君ハおもふことあらさるを
御めのとへゆかしくも見むなと思ひての
注 人ならずわかりとして聞きそめたりけるを
め見よりぬことをあはれとおもひやりてせんとは
私云御乳母からゆかしいとさ見れとはいえ見の事ハ此心
といへハ　紫の上の御ことハ
いとよりよりつ　紫の上のかくれみかたわら源氏の
わかきかた　秋 わしれ上へ源氏の給ひて
いとしく姫く　わしれ上の心に
應んとするを書のさせ給ひ　明石上わ自然にひかへさせ給ふ

おもくのしらなり
いかなりし君なんなれど此ゆゑひさき　明石上の母尼とし
実母明石上人にて此わかれ　姫君ゆゑとしてまてゝ母尼ハ加茂
絵の覚えある時もさるまゝにむかしきといふわけてもこそふかく
もの数ならぬ身ゆひくまかりぬれて
御ならぬ身すとしるわかてかり　秋 紫上れそひてまかりぬへ
注 輦車
若上ハ姫君よそひのうつくしさ車に乗りてまかりぬるに尼君の
ゆるりかなきさそしてハいかなる見えしかしてさきに
輦車ハ姫君の車のうちにさし紫の上ハ同車しかく乗内裏へ参り
紫上れ輦ゆるされかすまいかりかゝふりつゝとハ明石上ハ
姫君の給ふとそもハ不可然ん
私此段ハ紫上ハ姫君と輦車を同じくまかりぬらん明石上ハ歩行
かゝることハかとしさく紫の上ハ姫君の内ゆるしかるへき
わしれ上ハまかり給ふへし其事ハ不可然
注 上古ハ女房も輦車許されぬ類ハ門よりまかりて乱下りとさせて
承りかくまうし姫君を　わしれ上の心に

人ゝおと絶くいかりの　秋 とてなくさ給ふとも
源の御事は思ひなれ給ふとしく也しと見えさせ給ふとしき気色とも
うさりもなくうつき　明石姫君はさせ給ひ
うへ御ことにおほせは　紫上は実子のことく御懐にいたき
人のゆるしまし御ことなれは御ことも　あつかひまゐらせ
紫 紫上の御子は御方のあねすりにゐるなり
秋 紫上の御腹のやうにかしつきたまひき。
私云紫上の御腹の様に実母の明石姫君の御中と推察して
今うしろみとも申つるゝは乞へつらしくおもへはさうく
申つらぬ紫の実子なりしといへり申つるはんとのんと
おとゝも実相に見えも　源も名育を見と紫の実子ならは御母の
古しくかつ思ひしとかつけん物をさまあり
三日ゆして見ろ人はまうくのふ　紫 明石上の立かわり参りて給ふあり
その御さくま紫上わりし北上の御方へ御見えましし
御方へかわり　秋 紫上は退出あかまく 明石上の入かわり参り給ひて
御方へやん　秋 申しさせきうて明石の入まゐ御局あかし

私云当局林御中明石の姫君の御かはりにいらせ給ふし
かくあられ御の事　秋 紫上ノ御也
中 姫君の御としのほどにいとく思ひ月のあまりいまゝの御かとへ渡らんに
わりなく紫上の御とはあり
私云姫君の御かはりにおほせまゐらすへく紫上は実母にて中宮の御ことし年
月日たてはこそ実母の御こともおほし何とも隔心なきやうの御わかれ
ゆかりおもひのよられとうちとけぬやうにて御
秋 紫上と申す字は姫君も紫上も寄り合とも紫上とも明石上は
あれもいつく姫君を御母のさまにしておほせかくも覚えりといふかたちとんゆ
中 おもひにかよめともかく物語にかとものゝて
りのまゝとわいひさま　秋 明石上をすゝめ人とは紫上の思ひのまゝで
心へてかゝる源の心とかよひのおもふたへりけりといふで
まさいとをさうぐ　秋 明石上は心なく紫上をいへり
也うれ御中にも　秋 源のうへは御中にも紫上をあはれぶ
やうりさのひつまとりけりとあり

かくまゐりかよひ　わかれたる人のなかに

秘 これは玉かつらの君をはしめとして花散里をしのひかれし所を

出てまかし姫のもとに

紫上の退出の時に源氏もをしのひて紫上退出をもふれしそのくさの程にの

御てらる御かたをかさねたれのかつく

秘 紫上のみかと御子に姫君の御ゆかりのまゝにてかはる

女御の御ゆきに御よりとかくのめくる　哀 紫上のかはりに女御ゆ

ゆるかのぬるいかくれたるとかあり

花は明石姫君の御子に女御より五年の○御車にてゆかされ

御いとをかとぬるにかて明石上の御かたにゆかれとの御こと

私云此源氏の義侍より紫上の御かたへ御ゆかされけり退出

いつれの御たち女御のゆかりにて

さるかたはれなとなり　花よりいとにもさ右の方の

あはれかりとおもひわりきれ今とはしきに御かたへ

わかひさるに又君をとむかへおはしましける　ゆくさに御退出

いとうかりつにおいかのやうなる　姫君の御かたに

明石上のこゝろなり

源のことに御かへもてこそたもちのとてそみえさりける

同 姫しきとうまれ給ひてゆかれてまかれぬるに源氏より

秘 中宮出仕の時も　同 さ御かたしとはかにゆゝりと

ゆとへんてぬ源氏に参をもきろくてるなり

私云かりきさのそうきさにも源の御かたはれ同しの

姫とうまれとのなんにたかゆかりのかなとみきしかへされ

こしゆえる人よりなに給ひける　明石は上のかたに御浦はうらの

御車の時わかさのよめのかりてをき大井の里に住はるて絶えぬる

此姫君此三ヶの時紫上のかたへはもらはれ侍りしなるにて

これはしもたに　姫君さいのかへりなりのひとまれさ御

信のよの神をそ　みつからの源の御気をさまゆかり

あり御かへりかしつき　秘 姫君の御かへりのおはしまさひかけ

わかまかぬてとりきはかしかは　明石上にもつかはし何はかひなきを

ありきつゐてをおかへし　源の姫君かたのかはに何のさかかのゆるゝまさ

なしへとかくぬ御さ恩を　同し此姫君はかはりし

ゑをもつてき御心ちよ　秘 まさるさし
いとゞあはれ御らんじ　同 かくれ姫君はわかうふくよし
此母君の　わかれたのうひさかみをきよいひなし
きれいりをいひなしねとなり
いとゞ所あく　同 桃花でまれもしとあるひ気の様れ心
うらもさるべき　秘 紫上し
御ぬしひあるまれしくおもとをゆかし　ず 紫上と明石とのまき
さりとて何もこゝろなし　秘 うは人と明石上と思ふ所
松は後明石上の姫君を紫上の心よなおおかすまき
おとゝもあつて前世のこおかさうて　此世のあかさこま
秘 源の御気色うらにとあり　姫君御よ参り此事
御気色ひまさ海よみかし給く
秘 こゝれを源の姫しくあひひみまして
心うかれと無きまうまさう　心うかれしと云うり夕霧と云
秘 あ所との中にと随ふりくうきさうさ海かりしと云
たつまり給ひのれ　夕霧へ云あ所とゆやすまこ

今ハかいもとけかんと　源氏大臣家を体て隠居の事をもとん
れれかの中に功業名遂身退の心
出まいのう人の御あたよ海　源氏隠居し出家せらし給へんり
紫上御せつゆきれ人はこの地さ花と源好中宮ハおかすれ
れいよせよき此所こそ明石上の姫君にこれもこ明世紫上の作
姫君おかさうりよと心ける給ふ君と源の云さ給へて
夏の御まこの　むらう宴し其ハ源氏のり物にいうしるき
心あまりうう心へさ花も夕霧をおかすれおかうしく後見を
させ給へまひそれ人夕霧の源君おくしと云へ心
わか参とも外にわに　源氏の御とき有らせ中宮の内裏
よりれ数へ申おわかんと見まそしおかや常けより姫君とわれなし
つれ心との御もんはんひまう
同 執政人四十賀例　昭宣公 堀川太政大臣 貞観七年四十算
古今に堀河のおほいまうち君の四十の賀九条の家にてしける時によめる 在原業平朝臣
さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まかふかに
その秋太上天皇になずらふ御位えたまうてとなり

年官年爵

秋花ゐ人義一の院つゝきなしかり
葉むかしにまつり 中付 前ノ院ニも祖の名をとし而不にいふと於て
上天皇の尊号を給ふる中人食封尊号を祖並勝し皆院ノ名
はゆるさるゝの注せり以て略しく私に出しぬるの様し
長慶天皇以下ハ諡号し院よつゝきのつゝ帝の院を云ふる也
まさしく此太上天皇の尊号し院よ給きにあはさる人の院号をたつ
かりしハ敦明親王を小一条院と号せしかハ三の例あきらかにし但太上
天皇と号せぬならりけく院司年爵封戸なとハ太上天皇よ
一度かはらぬ也 是よりては花山院よ藤壺女院等六条院の院
すかにハ太上天皇になぞらへぬと云詞を添へたり 是ハ諡の服侵の
院門の尊号よあつからぬ院御封のことハ小一条院の院号の時より院
封以下如元と宣下せしによりて太上天皇なみの御封ハ法令にさたなか
りけり 東宮の食封ハ二千戸のよしに延喜式に載せて執のこれなく
小一条院も東宮の時の院封をそのまゝ有りしならんのよし令に源氏
君ハ太政大臣よりも院号をうけしあり給ふ太上天皇の食封ハ禄令に
三千戸の由見えしかれ小一条院の例をいふにこれを三千戸とのせしたがひき

まさに院（ことし）を給ふといふ詞ハ二千戸のよしよかるに院（ことは）そ
法如寺関白ハこのこと食封をうけ人給ひけるかな此ハ
それハ前にいふ摂政ある也七三条院の院封のことにくはしく
河海にハ太政大臣封戸ハ二千三百五十戸とかかれしかハ後ものり法令ハ二千戸と名の

河

三十九院号例

秋院号亥

上東門院 万寿三年らし

東三条院 正暦二年九月一日 院号

漢代暦曰北斉武成皇帝 河清四年四月 帝禅太子位自号太上

皇政為 天統元年

不践祚太上皇例

漢朝例

史記曰於是高祖乃尊太公為太皇 蔡雍曰不言二帝

漢書曰諸侯将軍群卿大夫已尊服為皇帝而太公未有號今

上尊太公曰太上皇 師古云太上極尊之親也皇君也事子也父故号曰皇不預治国不言帝也

本朝例

草壁皇子 天武第二子文武 追号長岡天皇

日並知皇子 天武子文武父 室字三年有勅追崇尊号称岡本天皇 見続日本紀

舎人親王 文武第八淡路廃帝父 追号盡敬天皇 崇道盡敬天皇

施基皇子 天智第三子光仁父 追号田原天皇

小一條院 敦明三条院御子 寛仁元年八月廿五日院号本春宮坊也

太上天皇 封戸二千戸 勅旨田千町

院司 別當 四位五位 判官代 五位或四位殿上人六位蔵人四人非蔵人在之

主典代 廳官 召次所 仕所 別納所 御厩所

進物所 厩舎 武者所 御随身所

太上政大臣の封戸ハ二千戸或百五十戸ハ太上天皇ハ二千戸也而

院号よりて御封なと給はるなり

此太上天皇封戸の事なきニ義なし 河海ノ義誤まり

くらゐハ世の常の事に 源氏 此事とまでも執政の人なり

むかしの家ハ皆わたくしの事なり

秘 あまたの封戸ハ政不政の二人の事也 源氏ハ太政大臣

達んたるよりかくの院司を補せられるんで又源氏太上天皇

の皆の例なしかくのことくハ院司なとさらにまゐらるとも

秘 て字清濁の事 濁りて太政大臣の御封ともに院とハ世

さ定まことにいふ いふハ院中也

給仕のことく今ハ一ごとに行ける事院号式も是宣下すとはいへり

秘 うしろめたしとおほしめすことなる

うら菜のまへの事よりこそあるへき

御寺の御式に准せられけるなり

かくても此事はおなしことにてありけるとや

不足よりかはりて 源の御事とも仰の御事かくも在世に

秘 此事 院の御事に准して

えらひて給ふなと見えけり 猶ありぬへし

円大臣のこと

秘 同云致仕のおとゝ内大臣より太政大臣にあかりて

是又同じ事にて太政大臣とゝめ内府より

並に任せらるゝ例有之一勢の清盛公も内府より任太政大臣

宰相中将中納言に

秘 左中納言兼按察使内裏へハ奏事を賀して云

御よ給ひて

わかれのおとゝ 内大臣に

夕霧中納言は如の事に

いつれのおとゝ

夕霧ハ致仕の君の亭主にて御寄りけり

人のまさりてさしあきらかなる人

致仕太臣の女弘徽殿女御ハ

秋好中宮にまさりて冷泉院の女御かくさせたまふと

に入のかりしを夕霧の御さまの後ようるひのかりうはやい
うれしうたにふるまく一位を服ゑみし也乙女巻ニ見てしかりと
いふれしと見く おりひなくとまさし
秋 雲井鴈ハ御すまく也其つく下すり夕霧の定中なとて拾と見る物ハ
女君の御かげ々の袖のみとし　秋 雲井鴈の物のとし
六位をくせとつふやきし　乙女巻ニあらし
わさみどりの菊の菊をば緑みるはこと紀紫の色をかりを浅や
秋 浅緑ハ六位をさしこ紀紫ハ三位に昇る義可然し
呉 紀為家ニ菊の花の菊の浅みとりあり時を霞かとも紀紫ト
うるとくもいとそうりしよのとし
宗 袍色ハ衣服令一位深紫二三位浅紫四位深緋五位浅緋六位深緑
七位浅緑八位深縹初位浅縹 深紫は宿竹なとく深し浅紫ハ五竹
なとく深し深緋ハ茜に加紫浅緋ハ茜ばかり 深緑ハ藍と刈安とに
て染なく浅緑ハ藍と黄蘗とにてく深く深ハなりにてく深し 今
世四位の袍ニ位巳上と云ふ、昇殿ハ一条院ニ正暦の比より如此なりたに
かれり小野宮右大臣の記なるへしよりて又紫をかりけるまなり 出

不の庭をきと定よとてつかまりおこなりは御まみたりと給つハ七位衣
色し六位なすくハ三つみなりうなくしよ之二位三位ハ浅紫なりと紫と
よおハ一位の袍の色しりやしの御事と云に大概をあかくさとと
庭は参議の中納言よ如す付九条右大臣袍をこつりけれとそに紀
河 紫ト侍り 後撰の哥よりといまかくいふり
浅緑ハ六位の袍し紫ハ四位以上の袍に紀紫ハ三位の袍古は四位庭と
位の後は皆袍のよし 同花よえくらり三位より一位まて皆紫にと
今世まてハ位の袍も同しも異なかりし 後撰よ所は参議より中納言よ
任ける時九条右大臣袍をつかはしける哥よなり君の衣をあさき
こそはれなきとらんといふるをおもひくるも中納言の事をとこそ紫 と云ん
うかりしおりの羽　夕霧の羽六位まくすといひしも
ちいりしにおもひしき　秋 大輔の君のとの称し
五大信の御歌とて
名にしおはなり名にそあれ菊の花ハしにいつさき色まく霞をかけり
我々て此君かよはひとものへ行く名にて御宿の白緑をなすしかん
浅黄色は浅黄ニハ位袍よきてしるし
後撰集 緑なりても名にて御所の菊の色のたるしやいく世かへりん

今案名さゝ所ハ名をまるめてかし　浅黄色ハあさき同し
（秋）名にて今ハなまさらさるらしさ中にもおもはさりしあさきと作也
いまはんもさせ給へりにもと　大輔の乳母のとの詞
御いこさらひまさりさく　夕霧中納言を殿給ヘハいきおひ給さるとていハり
おちし内大臣も太政大臣になりまへらしきは絵も雅おかり
不せなれん　不被之
三条殿ニ　（秋）大宮の住の給し　御所也
（前）故大宮の住給し二条の殿の所よ大宮おん方なる所なり
宮のおりし　大宮のなと給ひしかと
もしおもひく　太政大臣のおもしくして時のうち夕霧雲井雁大
りあてにくそくつら給ひし時のやうなると思ひて
かんさいとも見と　（同）鬒緑子方白花草八九緑童し前白氏文集
（秋）白楽天か白氏文集童稚尽成人園林悉喬木といへるとし中書日
一むつ君かりへし　（同）君かりへしひとりともてきむしれ名なん
三なから契りしも　おりにふれ給り　中書日前
あるい不ろかうゝ見
（秋）雲井雁と夕霧とし

わさまし　かりしよれ　雲井雁と夕霧とのかはりにつくれるなと
久かりし　嫗ニ今もれ　太政の母君人とし
（同）なりけれハ君のわするしきかりし人の所楽によりてや屋との御ふりて
亡宮のつさ小川のまゝしるのまゝしてそのふ君日もうりしそは
京清の能因家枕云ましても山乃志水と云といてうらさりし
名もそわるしもたはしものうりうらくうれし君りのわうけしとし
（秋）なるこきゝまてれにれれそくんもやさたいさて井のなる
（秋）太政の御なもなきかり
（同）なり太人のけそりてぬよんと屋まりとハ唯今夕霧と道なり
るすとてに合しいさつ井ハ小さき井し
（同）八雲御抄出水をいたて小井といさり小川と云も屋りし
わさくく乃るもといてさいよれもたくうれんて
わかん人のうきてまるてぬ屋りのれきこハかゝこ〳〵をかして
むつしかとなり　太政大臣内裏より退出のかくにたりける
むつしおうゆへし　大臣の時のうちすべし
中納言もおかし此とした　（秋）夕霧なり

さかすらしわさ
くるしき俗名とハ流しかれしえ配の事也　長　くれのもきこハ配つらんと月押これ
女ハまさしかるへし　雲居雁のしたしたまつりしハ大殿の心也
夕霧も女ハ女人也に中かへけり
ゆめゆめさきさるまし
うきひさるまし
わりつる御にふつらひ　秋　前の庭のみのおとも也
うら若くしかれ
わか心のさわき
はみれんとすゆかしくれとおもさかれまてとはいふらし
む　おさなきは夕霧の自称の詞也
秘　前ハ大臣も夕霧を見し夕霧とをいふ
長　まめひとも見ゆる心ひともまへ今れとも前のかれ
夕霧と雲井雁との中にしく辞餅のよし
秘　あはれんとは前の通りとにもにしれも大宮のまもと思へり
前のかれ　秘本の二人を様しくりひ出ぬとし
秘　そのくもさまはもしくもにらぬか今の小松も昔せまなり
う　葉しもいへうみならんとよりやつりうへし松の木思ひとのらん
いはけなき前のいはひつくらん小松は昔とにかり
長　おの御よ前ハこらしてとも殿ハ大宮のよの雲居雁おとかしく
さく人みかりまつらん下にあへかかん
秘　木とはうらしてとハ宮いつれももかくあさみおもし人を進
めへんたく殿の君ハ松本にぬとし
秘云　秘二殿の君の松本となれ御とハ女中まだ大宮の秘
殿まんかかれをさくらぬらん夕霧雲居雁のやくにもり
そとぬきまちて唯とを様してしとらく可秘ん　夕霧の乳母也
ちとこ君の筆ね乳めのと
つかりし御心も　秘　にとしよりう給しと思まじとし
宰相乳母
いはけなきもりきくれたのむまてしまふより根さしくハせの松の末かく
う　うらめるへてかさとしゝのむ葉の松まてとの秋の風よりつろ
秘　夕霧の句端雲居をも粉とし　おきすよりくまにいなん秘様のるまとも
女君まてあひかくおりくくいつとし　二葉より根さしくうつゆのとらいへ
つるまて雲居雁の面あふえつらしく　あれまし
神無月まつりかりつりいわとまて六条院ありめ葉あり

迄 康保二年十月廿日村上天皇の朱雀院に行幸ありし例を
うつしくはへらし河海にみえたり事多くなかけれはこゝに其旨
秘 下例ともあまたみえたり
同 康保二年十月廿三日御記云此日行幸朱雀院辰四剋出紫
宸殿自朱雀路到朱雀院入自永寧坊就馬場殿御左大臣源
朝臣可令召御馬之状源朝臣下殿御乃東祭上召左近少将
為光々進立東階小辺源朝臣御御馬令馳為光称唯退還本
陳暫左右近衛監以下近衆以上各六人起陳馳向御廐良久
馳御馬左右大臣下殿執御馬参来上奏之御馬小上 見十例次常年駒名十疋
随次馳之 或抄云此日は菓上に秋の行幸は後にとあそひ
これは此行幸も更はよとり冬は秋にわかりしを例にいへたり
此書云此ましはのゝ源氏の巣守をとる御ゆかりにこゝろ
朱雀院あと 源の御兄の院と御事也
あまた院 六条院源氏也
これ時より行幸ありし 巳ノ時也 康保之御記には辰四刻とす

宸殿に出御ありけり巳ノ時に行幸といつかしらなり
まいるとみえたるは 御饌八為人 此事は六条院東さん
さ月まつせりにわたりあるへし 五月五日良気し後騎射あるまて
あやめゆつりまいれとも かくふれ侍りきこえくるかむかせり
ありしてうかとにあれさんなまうつり
同 御記云乗輿移南殿自将東辺行列時未一刻下輿入内
或抄云日けしくてうしと未ノ時のゆめにしとし
庭れをのありつし行幸のみえ帰とりしきき
迄 道の人のおほ布単に帰りとあまてとられしみなり
軟障 絵とまいる幕引の低のか
せしめうとねき
秘 これしたは亘上れ御膳とも同の
これし不のうひたれさ
不しこれはよせられける鵜ひらすへし
同 御厨子所 別当一人預膳部満口女人鵜飼四人細代木之類
職員令云雜供戸 或本云たりくしニヘアリト点之
鵜夏 先代旧事本紀曰鵜御饗之時前日而入王神池
鵜入海底咋出底瓊

孝 同六条院まうくれまし乃厨子の鵜飼のおさとハ内裏まで
掛けりや　一説御厨子所ハ宮上の供膳を司也　それよりも鵜飼ヲ付也
ちはさきふなともひかり
同 天治四年九月十二日申尅之
釣殿召漁者丹波春助下細捕魚切一二喉鯉鮒昂放入之夜
還御　應和元年三月卅日之釣殿覧曳網又令浮舟
同 御記延長八年五月廿八從神泉苑西掖門入将殿右大臣御
令捕池魚右衛門督清貫朝臣捧不捕縛魚奉覧則御前料理
供膳餘給侍臣 右衛門佐魚菜調御膳所厨子 不一両人階下賜給臣下　小庭ハ　同十八年二月
廿日入神泉苑東門至馬埒下輿此門左常衛門以網捕池魚
付御厨子所調供又屏幔下調給侍臣木乃酉一尅競馬
同年十月八日幸朱雀院爲院造作乃御馬也左衛門督爲原
朝臣諸捕魚依請左衛門人率門令卑細系入池細菜池切
鯉鮒十餘隻於御前調供又於東渡下調給侍臣
いさとの御らんとぞおぼしけれ　又備夏より寝殿まで御覧
河とるの輿ゑりし鵜飼のなとめさむしとし花
山ふかりみちハ何方もおもふ秘とふかしのおまへてき

秘 西のおまへハ秋ぬ中しまの御らんて
秘川おもおもしえとりて本の紫のりかうなおもてそ秋の紅葉
はおもしろく、て秋ぬ中しまなりおもよりの有ちる風あきて
中のあらしのへ　秋ぬ中心佐方との原にておほえかゆく
御庭二面にひとく　御庭二面に
秘 朱雀院と六条院とし　少 主上冷泉 院 朱雀とゞの御庭より
の佐庭をいさけく侍りけれさし
秘六帝ノ義可し 秘ノ義也
せんしまうくなきさせかしかれと　御門冷泉 寛首ゑく浚泥の
御庭とも朱雀の次へおとさしれ
秘 おまへの庭ありさけらる有庭よせおとさせかいさかの
みとハ方佃りきりあいやしきは
芸 朝覲の行幸にも帛袍を装つく上皇をおもしかうかまて
秘 朝覲行幸の作法あらもまた夏として 字
私いやしくしさい恭ノ字ノしんしん
池のいをたれおおもふり　池のいをて蓑もへ倒 前の前裁之

鳥一つひとつ[illegible]さしおきて

又 同じく作法定まりて養ふ又鵜ハ

一巻是ハ定作法あり養ふまり

左とまで鷹のいりわたりてさふらふや

老いにけるかたちもあらはれん鵜鷹の鵜飼も時によりてまことにあは

御前の池のあさくおもひつらむさいつも鵜を賞せしめ給ひつゝまた

延長の昔をこそみるらむや

捕鳥養階下事　延長廿年十月十八日権中納言藤原朝臣

着小鳥於菊枝立階前養之船本氏玉進御贄

鷹飼之事　康保三年七月廿一日蔵人以延光朝臣以左

近助満中左近府生多公高右近番長播磨貞仕木並為御鷹

飼職員令公玉鷹司正一人掌飼習鷹大事　供御贄之時一

御鷹飼蔵人不被下之旨蔵人右依養之也

左人可賜勝記之由御之

私云右傍といへるハおほかたにいかなるおもひに

おほさきたにおほせてこゝろまかせてまゐらしておりのはまへ

致仕おほ出御を待て御勝に倒さゝせらるゝ倒前にまゐる

おりのしとに御勝のあれかし

以口女 莫不無御勝 日華記

見ごたへのあらはれもこゝそもめつらしきことゝよ

又口蹴鞠事をいふにや折植節などいふ楽器によくしたがひて

くうるわしの人めは

楽府の人々　地下の伶人

いさとの大楽なとをあつめて　上く楽舞楽などいわゆるにとし

朱雀院の行幸みゆるの賀

賀王恩といふ舞の　源氏と致仕相の青海波舞給し時の

内の御まへにたまはぬさまく　賀王恩林院の王の恩を謝し給ふ

みすてぬさまこそよけれ

桐壺の息舞給ふ勅禄衣を賜ふ

子息頭勅禄之時父舞踏

あるし院菊を折せ給ひて青海波の折おもひ出

河す院菊を源氏菊ハ朱雀院紅葉賀の時おもひいでゝ

藤にれたしにかわり給つるなり

源 見もてさえまつ袖の菊をおりつくすそれしけし秋をこひつゝん

秘 立ちりひしそふけく

見ましかは上ノ大臣太政大臣はともに舞給つる事を思ひて

くおしく下まうけ中ゟ如何

おもくての折に　紅葉の折とふ紅葉の賀の時のこと

これを人みておもひて大きなる橡葉のなりたるくいつり
なかれはきて　秘 菊の花ふみさしくはおもふひかしよと
時雨おりこそいりかけり　菊の花ふかきかへりし時雨さらすらん絶
又詞書ありけり
近おもふ
むらさきの雲みゆる海へ侍菊のたちまちよこつりかゝきせむ折りけるそらよ
呂 久かたの雲の上にて見る菊はあまつほしとそあやまたれける
河 慶雲者星之ふん
吴 同云あつしかや河海ニ慶雲見れんと見よりて仙境ともかゝる
一説紫雲とも河海ニは一説よりくよ堯の時の瑞也仙境也
此を紫雲といひ菊のまかふよしやわりし又菊は星に似たれはなれ
星と読りし又紫雲横中れぬよよ侍る歟まて
帝仲記云帝嚳紫雲之瑞生堯也雲向於北斗出南風雲飛漢
上臻堯母感氣快岫雲愛之下入堯母之懐妊也帝王世記云
堯帝生時紫雲覆於殿上北斗時雖遭九年之洪民諸不菜食
時をまつ秋とはしりけりとかし　おもふの絹し
秋とて絹く時しそまさるれ菊のむらうつろふにも是れまさるれ

秘
河の月なと見たし　川なとくまつりとそ源氏の左上香道
うつりゆくなりといひけり
青き赤きなと侍るをと　白橡　吴 花鳥　秋
呂 白橡は二色あるわときこえて青色赤色しこそよつはには
いらさるにはおもをあらはせさるしと白橡ぬすむ　玄ニは麹塵被袍束
と云りかは赤色よりそえこれ下かきて白橡は青色ありよ云ひ深の下かさ也
ゆきにも此の色嗣て赤色太のは青色をもてさう行者衣えよ
しぬりぬ　河海ニ侍りたるの色肥れてのうら裏なとの例義證
うるかよくはしからぬなし　況水原抄にれ説は皆誤し
河 橡は順か和名ニトヒツルハミト云　私云世俗之ドングリト云木之一名義也
侍るなとも此をもてにはしつひかしいひし時よりさ侍りしおもふ
橡衣は伍と衣し仏は上臈も思ひぬ物なれは此衣なれとも
科なとにもわくつねいえむさくあすれかと侍るし
古今 侍るもの目と人衣れうしもなくあらんといつれことひそてうらと
同 つるはみのきぬはひとつ衣わやまくもことにきぬかしこのゆめ
水原抄云秋読ニ云りつくれるしのゆしまと

私云河海ニ以テ衣服令儀応令天長格太政官府新儀式ホニ云
此地ゟ出来らんけるも出来る…
或抄ニ云樒なり延喜式ニ十日雑染ノ部ニ白橡ト…
深くあくをさしとて唯白橡ト云ハ別ニ不見赤色ト云も
同じ天子ノ御料也今ハ赤色給ふを…
文ホハ只ノ不見内裏ノ御の赤色御袍ハ…
花色ニ似たる…
橡ニ不…
…
…

きゝのうちに…
…
又角も総角の額といへる…
…

舞童の袍也　同日　同舞童…
一曲…

小楽ともし

楽不…
　　　同
樒し
旧記ニ以書司女官召ス女房之由…
御祀延喜八年節会雅楽寮…
女司之書
　　　同
書寮也
承香殿…
於本座…
御おほみ…

宇多法師　和琴名物也以樒作之先一条院御時内裏焼亡
之時焼失
新儀式　四月
…若君…近衛府音楽
…御出御屏風南辺…
頭…勅可召…
草墪…御帳東西一許ホ大臣先進…草墪次…大臣

和琴
　　同
…

右書司一人執和琴出東庫子戸献之 理宇多法師 若菜 絲竹戯
右殿上侍臣能歌者願之王口遊動並数曲之後葵見參
小野宮右大臣記長保二年十一月十五日新宮之後出御南
殿同右大臣以下管絃人着御前草墪書司々々女孺取宇陀
法師出自御障子戸置草墪前又絲竹次々取出皆書司女官
役之見前例或書司女官取出和琴已後次々絲竹並以次為
等執之歟
或説云延久四年宇治殿命之於南殿御拯之
時右宇陀法師 和琴 其羽云御夕ちし比羽ま薦しちと宇陀乃法師

帝朱雀
とよもし人
秋をへて時雨ふりぬる里人もかはらぬみちはありなとぞ見ね

秘
朱雀院の以五位の中にをこうはすあけしと述懐の心を
秘
秋をへて時雨ふりぬる身のおもと朱雀の旱下の神も時雨ふりぬる
里ありさへ秋風ふくはなかりけるとし

行
懐恨遊仙房 朱雀院衣御代あへうは行幸に
うつし前にそ
ありしとうつる時りしめ

帝冷泉
よのつねの秋風ふとめこれはいのちへの世をしにほへる庭の錦を

行
冷泉院御自歌乃らん
秘
若葉の秋風よいわしほとおり
秘
よのつねの秋風ふよのかはしにほひをしるの錦の錦
とよのあきときて花のちせの人と詞よりちかし
安
むしの秋風かぜのつをしいりしつとてかんとこ
人をひとはりのと
御からいよし
中納言のさらひのよ
冷泉入と乃時さ歌
秘
涼とまとしとりとなりてかとありし
夕暮と是も又涼まれありて
然さ
ましとり是とありつかなり
秘云是ハ夕暮なんとすく似つらとにても但何まても同
あつくにあつく夏きえいむおりむあ
みつくて冷泉夕暮とて当家にかんとそいおとありし
ありかにまれてし理而そ 冷と涼との似ありなし
夕暮也
ほし極有しなそかちさりんかくめさ涌しとい了
又わさやうよりのしき而そ夕暮れましうさとし
冒頭上人
けうれ夏上人

13 新御戯れみてくり

弁おねの殿　石毒の大将なり

さるへきおとこそ　前世の契りよりくにまされさりしくあはれと

いつもかゝるひとは　源氏お盛なるのみをといへり

凡此書ハ源氏の栄花を極め盛衰を書きてあり栄花をとし加賀民

ますます明石姫君入内の時栄花を筆許され栄花をさ隔ての

うちそ落葉よりのちは女三の宮出来て御心をうつされ栄花も衰れ

なかなかみかく終より世をひ源氏も夕顔に御物思ひ多くと

をしかずかずに世の盛衰をあらはさんとの書なり

んは侍べく